

第8回世田谷フォーラム

パネルディスカッション

少子化・子育て対策 待ったなし



司会 鈴木淑夫（世田谷フォーラム代表）

パネラー 泉健太（内閣府少子化担当大臣政務官） 田中喜美子（育児研究家）

山口拓（東京都議） 田中優子（世田谷区議）

1. 政府内閣府から少子化担当大臣政務官「泉健太氏の発言

泉議員：今、新しい政権の下で内閣大臣政務官として活動させていただいています泉健太と申します。私自身は、京都の衆議院議員で、隣が前原誠司さんや山井和則さん選挙区ですけれども、京都の伏見区、特に歴史的に申しますと天王山の戦いというのがありまして、その天王山がある場所であったり、あるいは全国の商売の神様である伏見稲荷大社があるところです。まあ鳥羽伏見の戦いなんというのもありましたけれども、そういった地域から衆議院議員として、三期目でございます。

この政権は、割かし分かり易くて、大体政務官クラスが三期生、副大臣クラスが4期生というような形で、運用されておりまして、それだけで鈴木先生が現役でおられれば、大

臣になられていたというふうに思いますけれども、今日こうした場所にお招きいただき、ありがとうございます。

今日は少子化対策ということで、先ほど田中先生のお話を後半だけ、お伺いしていただきましたけれども、私が言いたいことは、まったく同じようなことを、言っていたのかなど、いう風に思います。私は現在35歳でして、昭和49年生まれです。第二次ベビーブームのギリギリ最後の時代に生まれたということになります。今の日本というのは、まさに我々世代が、40歳になるまでに、何とか少子化対策に手を打たなくてはいけない、と今更ながらに言われているのですね。しかし本当は我々世代が、20代の後半に差し掛かった時に、やっておかなければいけなかった。それができずに、10年間遅れていると、私は見ております。

正直言いまして、我々世代の女性たちが、今から出産をするということは、ハイリスクという確実について回ります。本来女性は結婚適齢期、これは男性も同じですが、結婚適齢期があり、出産適齢期があるわけでした、先ほどの田中先生のお話しにもあったかもしれませんが、私は日本の社会が、政治経済両面で、若い人たちに対して、出産や結婚をさせないようなシステムを作ってきてしまったということが、ひとつ言えるのではないかと思います。

考えてみますと、以前は学生結婚なんというのも、大学生同士であった時代がある。今は確かにそういう方々も中にはいるでしょうけれども、ほとんどは大学生活を送って、3年生ぐらいで、みんな同じ格好をして、長蛇の列を作って就職活動をする、この就職活動についても、この不景気の中で、およそ個々の人間性を否定されるような面接数、そしてそこから入社できないという前に、面接を断られるというような経験をするわけです。それは人生の将来的な励みになるとは思いますが、実は我々の時代も就職氷河期と言われておりましたけれども、サーフティネットがない、最終的に就職もできないという状況に晒される若者が増えてきた。残念ながらこの若者たちの就職率というものは、非常に低い。そして結婚出産においても、当たり前ですが、生活していけないことになりまして、非常に（結婚出産の率も）低くなっているわけです。

一方で、じゃあ就職できた若者は、どうなっているかというと、おなじように、今度は長時間労働に晒されるわけですね。圧倒的な長時間労働です。この日本、余り労働時間規制もまだそうきつくない。実際にはサービス残業をやらされているという状況がありまして、20代ではへとへとになるまで働かされる。要はまったく働けない若者どもの凄く働かされる若者と、この両方とも恋愛の機会、結婚の機会が減少していると、今の日本の状況だと思います。そして漸く、何とか30代ぐらいになった時、結婚をとぼちぼち考えるということで、今の結婚年齢になっていくと、しかしそこから出産が始まるというのは、

さっき言ったようにリスクが高い出産が待っているということで、総じてこの国は、少子化に向かっているというように思います。

そしてまさに首都圏の問題でもあります。子どもを産もうと、夫婦で決意決断をした後の環境を見てみると、やはり非常に子どもを育て辛い環境がそこに横たわっているのだと、まあ待機児童の問題しかり、犯罪の問題しかり、ということです。特に待機児童の問題は、おそらく0作戦と、今までの政権は言ってきましたが、これは不可能だと考えています。潜在的なニーズも含めて言えば、2.5万人と言われていますが、潜在的なものを含めると、実際には30万人から100万人の待機児童がいるという話まで実はありまして、待機児童を0にするということは、難しいですね。しかしかといって手を拱いていることはできないので、とにかく拠点を増やす、そして多様性を持たせるということが大事で、今までの数十年間変わっていない規制にがんじがらめになった保育所、幼稚園という考え方だけでは、受け皿になり得ないという風に思います。それは保育ママという風になるべき小規模の保育形態を考えていくことや、幼稚園、保育園にも、良い意味での規制緩和をはかる、そして拠点を増やすことが、求められているという風に思います。

今いる子どもたちを大事にしなければ、やはり次に生まれてくる子どもたちの数も増えないとは思っています。まあその意味でも、今日も長妻さん原口さん、菅さん辺りがやり合いをしていますけれども、子ども手当という問題があります。私たち政権党といたしましては、子ども手当というのは、大きくこの国の子育てに、国民の注目を集めて、底上げしていく政策という意味では、非常にインパクトのあるものですが、いわゆる子ども手当だけで、完結するものではなくて、それと同時にそれに付随する環境整備をしていくことが大事なのだと思っています。

そして政治の側のもうひとつの責任としては、特に厚生労働省と、文部科学省、縦割りが非常に弊害をもたらしていると思っていますので、子育てを一手に支援できる、また財源もひとつの出所から出せるような省庁再編による子ども家庭省というものが実現できればいいと、これは少し時間がかかるかもしれませんが、そういうことも考えています。以上で、私からの最初の発言とさせていただきます。

鈴木：泉さんありがとうございました。では次に山口都議おねがいます。

2. 東京都議（世田谷区選出）山口拓氏の発言

山口都議：ご紹介いただきました民主党の都議会議員山口拓でございます。私もただいま7歳になる娘と9ヶ月になる男の子の子育てをしながら、都議会議員をしている者でござ

いますので、まさにこの少子化の問題、また子育てをしていくことが東京においては、特に大変であるということを実感をしている一人でもあります。今、泉先生からお話がありましたように、少子化というものは、さまざまな要因が複合的に絡み合って、起こっている社会現象のひとつであるという認識の下に考えると、単に子育てをし易い環境を整えていくのか、また安心をして産める、育てることができるといった社会を作り上げていくのか、まあこういったことが、大きな解決の基礎と私は思っております。

当然のことながら、東京都をはじめとする、都道府県はそういったところを主眼に置き、またこれからお話しがあると思いますが、さらに細かな政策をもって、ひとつひとつの課題の実現にかかっていくようになると思います。それでは東京都はどういう風にしていくのかというと、それぞれに足りないところを、十分にケアしていく。また広域自治体として、それぞれの区町村が実現をしたいと思っている、それぞれの町に必要としている政策をどのようにサポートしていくのか、実現をするための予算だったり、人であったり、環境であったり、というものをどのように整えていくかが、東京都の大切な役割なわけでありです。やはり何と云っても、この大きな三つの柱になってくるのが、東京都が3ヶ年をかけて実現に向けて取り組んでいるわけですが、ひとつは子育てと仕事が両立できる雇用環境の整備をすること、ふたつ目は多様な保育サービスの実現、これは競い合いによって大都市東京に見合ったサービスを拡充して待機児童5千人を解消すること、三つ目は社会全体で子育てをして、子どもを暖かく見守ることによって、子どもを育てやすい環境を作って、支援をしていくということです。この大きな三つの目標を掲げて、今東京都は取り組んでおります。

さて私の下の子どもは二月生まれでございますので、0歳から保育園に子どもを預けるのは大変困難です。非常に厳しい状況があります。実際子育てをしていると、保育園と一概に言っても、どこに預けられるのか、あるいはできないのか、実際子どもをもって、育てていかなければ分からないことが、たくさんあるわけなのです。どうしても土日は、保育園はお休みになってしまうので、商店街に行くと働くお父さんお母さんも、ほとんどが共働きですから、こういった人たちは、一番忙しい土日に子どもを預けることができなかつたり、私のところの子どものように2月生まれの子どもですと、半年間預けられるはずの0歳児の保育サービスを受けることができなかつたり、まあ細かいと言われている子育ての環境のサービスが、まだまだ見落としている部分がたくさんあります。

実際子どもを生まれるまでの環境ですが、私の一人目の子どもが生まれるまで三年かかりました。不妊治療というものを受けていましたが、不妊治療という言葉は私は余り好きではありませんが、「妊活」と夫婦で呼んでいました。「婚活」ではないですけれども、ふたりで励まし合いながら、病院に通っていましたが、まあこういう風に、社会的に子ども

が増えないことが暗いこと、子どもができないことが大変なことではなくて、みんなでどうやったら、子どもを生み育てることができるのかということを考えていかなければならないと思います。

私には、長女と長男の他にもうひとり子どもがいたのですが、病気で亡くしました。生まれてくるまでの間に、お腹で障害をもってしまって、出産と同時に亡くなってしまったのですが、やはりその時も、お腹にいる子ども見てくれる病院というのが、本当に少なかった。こういった安心して子どもを産まれてくるまでの環境というものも、もう少し日本全体で取り組んで行かなければいけないというように思っております。以上です。ありがとうございました。

鈴木：どうもありがとうございました。それでは最後に田中優子区議おねがいします。

3. 世田谷区議田中優子氏の発言

田中優子区議：みなさまこんばんわ。地元世田谷で区議会議員をさせていただいております田中優子です。今日は、田中喜美子さんのお話を伺って、まさに私そのものだったというように伺いました。というのは、今18歳の男の子の母親なのですが、何とか保育園には預けられましたが、私の議員になる前の仕事は、時間が大変不規則で早朝のレッスンあり、お勤め帰りの方が立ち寄って、語学をならうというカルチャースクールでの仕事もあり、昼間は日本語学校、タイ語の講師としてフルに仕事をしておりまして、保育園の時間が間に合わない状況だったのですね。そこで夫と夫が迎えに行くのも、もちろん間に合わないので、友達とか同じマンションの近所の方とか、二重三重の保育で何とか乗り切ってきたという経緯があります。まあこれは、「一人でこりごり」というような心境の子育てを経験いたしました。

それは私だけではなくて、夫の方が「もうころごり」という状況になって、一緒に朝順番に、子どもを保育所に送ったり、それから友達の家を迎えに行ったりということを夫もやっていましたので、こんなに大変では二人目はとても無理という言葉が、彼の方からも出てくるような、そんな状況がございました。それで縁あって、区議会議員にという話がありまして、参画させていただいているのですけれども、私の原点は、やはり子育てがたいへんだった仕事となかなか両立できない多くの仲間がいるということで、子育て支援を何とかしたい、という思いが強くて、政治の世界に入りました。

もうひとつ思ったのは、まず仕事を持つ女性にとっては保育園・保育所、今本当に待機児童問題がたいへんなのですけれども、それと同時に私は一年間は専業主婦で、一年間仕事を休んで子どもを見ていたんですけれども、保育所に預けながらの子育てもたいへんな

んですが、専業で子育てをする1年の方が、もっと辛かった。そういう経験があります。マンション暮らしで、近くにちょっと見てくれる昔だったら近所のおばさんがいたのですが、子どもを連れて公園に行っても、みんなグループになっていて、なかなか入れないのですね。それで公園に行っても孤独だし、雨が降った時なんて、どこに行ったらいいのだろうって一日中狭いマンションの密室で母子しかいない状況で、今日一日どうやって過ごしたらいいの、というような辛い子育てを経験しました。ホントは楽しいですけどね、でも辛いのです。

そういう経験がありましたので、議会に入って、一番初めに質問したのは、保育所増やすことももちろん当然のことながら、専業で子育てをしているお母さんにホンの一時でいいから、預かってくれる場所を、仕事をしていなくても、理由を問わないで預かってくれる時間を作って欲しいという質問でした。その当時は、11年前なのですが、世田谷区では、とんでもないと、保育園作るのだったたいへんなのに在宅で専業で子育てをしている人の子どもを預かりですかと、いぶかるようなホントにそういう雰囲気だったんですけど、あれから11年経ちまして今では、世田谷区は「子育てステーション」というのができて、理由を問わない一時預かり保育制度というものが展開されています。そこまでやっと時代が追い付いてきたという風に私もうれしく思っているのですが、それでもまだまだ育児ノイローゼとか、虐待の問題もありますし、足りないところが、悪循環などところがあるなど、日々実感しています。

それからちょっと世田谷区のことをお話ししますと、世田谷区というのは、東京一子育てがし易い街と謳っていたのですが、待機児童全国ワースト2でしたか、まあ人口が多いこともあるのですが、どこが子育てし易いのだ、ということで、毎日のように私のところへ、来年の保育所の申込みの〆切が迫っておりまして、悲痛な叫びが毎日のように届いています。まあこのままでは、仕事が続けられない、保育園入れない。どうしてくれるのだ、どこが日本一子育てし易いのだ、とお叱りと悲鳴が届いているのですが、やはり子育てし易いという印象ですか、イメージは産後のケアとか、発達障害の相談は全国で初めてとか、やっているのですが、どうしても子育てし易いイコール保育所に入れることだと思うのですね。ですからその部分に関しては、六年間の計画で2千人以上増やす計画があります。今年度来年度だけでも、2千人です。頑張っているのですが、作っても作っても潜在的にどんどん出てきてまして、また不況もあって足りないという状況があります。そんな中で、区だけではとてもできないので、国、都の施策を、どううまく繋げてやっていくか、というのが今後の課題だと思います。

また子育てという意味では、お母さんたちが孤独にならないような、生きる力をもった子どもに育てあげて、子どもの不登校でお父さんもお母さんも悩むようなことのないように、私たちも考えていきたいと思っております。以上です。

4. 2つの論点 「就労環境の問題」と「社会的基盤の未整備の問題」と文化の違い

鈴木：ありがとうございました。色々な観点がでました。司会者の方から独断と偏見で論点を整理させていただくと、大きくふたつの論点が出たと思います。ひとつは泉さんが言われた就職できない、あるいは就職しても長時間労働で経済的に苦しい、だから30代に結婚をするという現実の労働状況のことです。もうひとつは、保育サービスというか、待機児童の問題が、その典型ですが、社会全体で子どもを育てるという保育サービスの供給体制ができていないために子育て世代が苦しむという社会基盤の問題があるように思います。その為に、基調講演で田中喜美子さんが言われたように「子育てはもうコロギリだ」という言葉がぴったりくる社会状況になっているのだと思います。それで、田中喜美子さんにご発言いただきたいのですが、その前に田中さんに質問の形で、お話ししますので、それも含めて三人の政治家の意見を聞きながら、感じたことをお話しいただきたいと思います。

私の田中さんへの質問はですね、スウェーデンとかアメリカとかでも、経済格差が生じて、若者が結婚できない、育てられない、というような問題が、同じように起きてきたはずですね。ところが日本は親の家に居候をしている。だもんだから、結婚できるまで結婚しない。どんどん晩婚化している。そのうちに本当に一生結婚しないで親といっしょに暮らしている男女がどんどん増えてきている日本ですね。ところがアメリカやスウェーデンでは、成人したら親元を離れますから、大学卒業して就職して親元から通っているなんてのは、異常な現象です。みんな独立するわけですね。独立してそういう文化をもった国ではですね。同じ問題が起きた時に何が始まったかという、俺一人じゃ食えないや、と助け合えば家賃にしろ電気代にしろ、節約すれば生活できるじゃないかと、一緒に暮らそう、むしろ結婚しよう、子育ても一緒にしようという方向へ動いたんですね。さあ、このふたつの違いについて、田中喜美子さんの専門のお立場からのご意見をいただきたいのですが。

私はどうも、田中さんの言葉を借りると、男女共同参画というのが日本では、できない、男女共同参画でやるのだって、いう文化が根付いているところではですね、若者の所得が減ったら、男と女が助け合うのです。さっき区議の田中優子さんが言われたように、専業主婦孤独と、しかしスウェーデンとかアメリカでは、お互い助け合うのですよ。今度は私が何人か、面倒見ましょう、とかね。それは女性だけではなく、男性もです。どうもその辺に文化の違いのようなものがあって、こんなに少子化問題が進んでいるのじゃないのか、という気もするんです。

親のところで住んで独立していないから。もしかすると田中喜美子さんがおっしゃたように、0歳児の時から、自立心がついていないから、それが文化としてあるのかもしれない。色々申しましたが、それでは田中さん、おねがいします。

5. 田中喜美子氏の見解

田中喜美子：色々面白い指摘というか、私自身も思うところのあるたくさん出てきて、うれしく思います。で今、おっしゃった中で、お答えできるかなと思うのは、日本の子どもと親の関係なのですが、これは確かに世界的に見ると、不思議な依存関係というのがあることは確かです。ですからいつまでも子どもは親のスネをカジって、母親に甘えて家にいるという男の子がいます。統計があまりないので、私には分からないのですが、諸外国に比べれば、きっと多いと思うのですね。で、その中で何が起こって来るか、親子の関係の中で何が起こるかと言えば、それこそ学問の対象として、とても面白いと思うのですが、母親と男の子の関係というものも、本を正せば、妻と夫の関係なのですね。

夫については、私がいろいろ何百という家庭のケースを見ていて、基本的に日本の男は家庭から「逃走」しています。「逃亡」していると言ってもいいかもしれない。なるだけ逃げていくのですね。妻に向かって「家庭はお前に任せたよ」と言って、みんなですね。この関係で非常に不思議なことには、妻に財布を渡してしまう。今や銀行の通帳を妻に渡す。こういう夫のいる国は、世界の中でも日本だけで、珍しいことだと思います。これもどのくらいのパーセントの夫が妻に財布を渡しているというデータがないのですが、アメリカとスウェーデンと日本と比べてみたら、面白いでしょうね。

ともかく日本の男は、妻に財布を渡しています。これは不思議な現象なのですね。これは平安朝の辺りからずっと続いている現象なのです。財産というのは、女を通じて次の世代に伝わっていくというのが日本のやり方で、女なしでは夜が明けぬ国が日本だったので。で、そのことを私たちは忘れておりますけれども、それが明治維新以来、欧米風の法的な制度も入ってきて、女は虐げられてきたようにみんな思っているのですが、実はそうではなくて、日本女が非常に威張っていた国なのです。今やそれが先祖返りしてきたのではないかと思っています。あまり文化的な言いませんけれども、女がデンと座っていて、そこに男の子がくっついていて、その男の子は自立できないで、異性を掴まえるのも、なかなかできない、という形の悪循環があるのではないかと思います。でもこんなこと長いこと話してもしょうがないけど、まあそういう事実があるということですね。

その中で、「子育てを一緒にしようぜ」というような男がいない。子どもが産まれると、夫は「これで妻は子どもの方をむいている」と、「俺は自由なのだ」という形で、家庭から男が「逃亡」する、という形が。私が「ワイフ」を通じて見てきた日本の現実の家庭の姿です。

ところが最近、この傾向がだいぶ変わってきました。男性が子育てに関わろうとしています。非常に良くなってきています。私はその意味では、希望を持っています。ただですね。

男がつまり父親が子育てに関わる時の関わり方なのですが、「ちょっと待ってくれ、ここはちょっと違うよ」という部分が多すぎる。それはどういう事かというと、男性がつまり父親が第二の母親になってしまうのです。こういう関わり方は絶対にダメなのですね。男と女は違う。こんなことを申し上げると、フェミニストの方から叱られそうですが、男と女は違うと私は思っています。

でその中で、子どもに対する構えというか関わり方も、男は女親と同じように、細々した世話をやいたり、「寒いじゃないか」と服を羽織ったり、おむつを替えたり、もちろんおむつ替えるのは、悪くはないのですが、そういう関わりが、男親の義務のすべてであるとは、思ったらダメです。そうじゃないのです。男の役割というのはですね。これ以上は申しませんが、そういう男親が増えていくという傾向が、この頃急に強くなってきた。だから男女共同参画社会といっても、子育てに関しては、女と男が同じような姿勢で子どもと向き合ったら、子どもに対する過保護や過干渉は、ますます増幅されていく。だからそれはダメなのだとすることを、申し上げたいと思います。

まあそういうところで日本の男性よ、頑張るって欲しい日本の男性は世界にも珍しい特殊な状況にあります。ここにお座りいただいている3人の男性がいらっしゃいますけども、この方達は日本の男性の代表ではないと思います。非常に珍しい特に上等の男性ばかりです。(笑い) 日本男性論というのは、随分書かれていると思いますが、フェミニストの側からの男性論も書かれていいのではなかと思います。

6. 3歳までの保育歴がある子是不登校児が少ない？という統計について

最後にひとつだけ申し上げたいのは、子どもの時に保育園に預けるのは、3歳まで母親の手で育てる子どもほど情緒の安定した人間になるんだという錯覚がみなさんお持ちじゃないかと思うんです。皆さんだけではなく日本の大半の人がそう思っています。でこの点に関して、是非申し上げたいのは、徳島大学のデータで、これは1973年のデータなのですが、3歳までの保育歴のある子どもは、不登校になる率が非常に少ない、というデータがあるのです。でこれは私が、女性のデータブックの中で発見したデータなのですが、これと同じような調査をしてくれた団体やデータがありますか、聞いても、どこもないのです。で徳島大学だけなのですね。でこれが不思議なことで、ここには議員さんもいらっしゃいますので、是非統計を取ってみて欲しいと思います。三歳までの保育歴がある子どもが成長してどうなったか、何か悪いことばかり言われているような気がします。これは私の偏見かも知れませんが。だからそうじゃなくて3歳までに集団の中で育った子どもがどういう形で遅く育っていくか、というプラスの面をね、もっと発見するために、恐れないで不登校の子どもたちの社会的背景にある子育てを研究していただくという、そういう道筋の付け方をさせていただけないかなと、思うわけなのです。

子どもを自分の手で育てたいという母親の望みというのは、大きいし、そしてだからこそ良く育つのだというこの先入観も大きいのですね。でこれについて、しっかりした学問的な裏付けが必要だと思います。何かの時に、こうしたことを思い出していただいて、こんなことを言っている田中喜美子という人がいましたよ、何て言っていただくと、うれしく思います。

鈴木：田中喜美子先生の本は、受付に出ていますが、私は2冊しか読んでないのですが、非常に強調しておられることは、0歳児のところで泣いたらはいはいと甘やかしたら、自立心のないわがままな子どもになってしまう、まあその延長線上ですね。つまり3歳児までの間に保育所に入って集団の中でトレーニングを受けた子の方が自立心のあるしっかりした大人になるということです。さあ、ここで二人のレベルの高い若いパパですが、二人ともちゃんと子育てもやっておられるようなのですが、今の田中喜美子さんの発言について、どう思ったか、お聞きしたいと思います。では泉さんから、どうぞ。

7. 泉家の子育て

泉：今我が家は、5歳、3歳、1歳で、3人の子どもがおります。上が幼稚園に行っていますけれども、私は実は幼稚園にもどこにも行っていません。珍しかったかもしれないですね。

おそらく国などが、さっき田中先生が言われた調査などをしないのは、レッテル貼りになるのを、多少気を使っているのではないかと思います。要は色んな子がいていい、保育園に行く子、行かない子、またその結果、行く行かないで、将来が決まってしまうような観念が広まってしまうのを考えて、(そんな調査が)やられていないのかな、と思います。

でも考えてみれば私の場合は、5人兄弟の末っ子で、行かなくても集団が家庭にあったのですね。僕自身集団の中で生活していくということの意味は、変わらないのではないかと思います。

そういう意味では、田中優子区議と同じようにマンションで私の妻も子ども暮らしている。ともすれば友達もいない。話し相手がいない環境になる、そうすると本当に母子の密着度が強くなるのと、精神衛生上良くないと、思いますよね。やはり人間会話しなければいけない。子どもとは会話しなければ、これは虐待にも通じます。そういう意味で、集団の中で育つことは大切であると思います。

今新しい政権で、政策を作らせていただいているのですが、来年年明けくらいには、「子

ども子育てビジョン」というものを、昔の「少子化対策大綱」に当たるものを作ることになっているのですけれども、今は「男女共同参画」と「ワーク・ライフ・バランス」と「少子化対策」という三つをほぼ一緒に考えなくてはいけないという思いが日に日に強くなっています。

その一方で「男女共同参画」といっても、かなり世代的に差があって、今世の中で意志決定ができる世代の方の感覚と、若い世代の感覚では相当違うなと、いう風に思います。先ほど山口先生からお話しがあったのですが、若い世代は当たり前のように子育てに参加する。そこで気を付けなければいけないのは、どう父性を保つかということです。およそ我々の世代は、鍵っ子世代でもありますから、父性を持ってない世代でもあるのですね。父親が家に給料を現金で持って帰るという知らない世代でもあるわけです。いつの間にか、通帳に振り込まれている。いつの間にか、お母さんが使っていて、お父さんの役割が小さくなっている家庭で育った世代が、今大人になって子育てをしている。その意味で父性の継承というものをどうしていくか、もしかしたら、奥さんの方に父性がある、さらに旦那さんの方に母性があるかもしれません。でもどのみち、家庭には父性と母性が大事なのだと、いうことだと思います。そこをどう作っていくかということを、お話しを聞いて感じました。

鈴木：ありがとうございました。では山口さん。

8. 少子化で余った学校のスペースを地域で活用する提案

山口：以下同文と言いたいところですが、そうもいかないでしょうから、申し上げますと、子育てができる環境というものは、たいへん重要だと思います。もちろん家庭もそうでしょうけれども、今お話しをしていて、たいへん感じたのは、子育てをできる環境を親が、選べない。保育園に預けられるか、どうか、必死で、自分が子どもを通わせたいと思う保育園が選べるかどうか。預けられればラッキーのような、そんな環境に、ある中において、子育ての選択の幅が、極めて少なくなっているのは、大きな課題だと思います。

例になるか分かりませんが、私は区議会議員時代から、田中優子さんとは同期で区議会議員になったのですが、その時代から言っていたのは、ある施設を有効活用することによって、例えば保育園だったり幼稚園だったり、十分に転用はできるのではないかと思います。議会でも再三言ってきたわけですが、小学生、中学生が減っているのだったら、小学校の中に、保育園を作る。あるいは高齢者の方々のデーホームのような施設を作る。そうすると学校の中に、ひとつの小さな社会ができる。で給食の時間は、保育園の子どもが、高齢者の方々とみんなと一緒に食事をする。お箸の持ち方は親でなくても、地域の方が教

えてくれるのではないかと思います。校庭でサッカーボールをける時に、こんなに強くけつたら、あそこで散歩している子に当たるのではないかなと、ちょっとした気遣いもできる。階段を登っているおじいちゃんおばあちゃんがいれば、手を差し伸べて登るかもしれない。小さい子どもたちが帰る時には、バイバイと言って配慮ができるかもしれない。まあそういった新しい物事の見方による小さな社会改革というものを構築していくのか。子どもにとってみると、学びの場は、道德とか情操教育を与えられる環境作りと、教育への施策というものを、平衡して考えていく、ことがイイのかなと、田中先生のお話を聞いていて思いました。

鈴木：田中優子さん。おねがいします。

9. 田中優子さんの発言 若い世代は男女で子育てを共同で行う文化が芽生えている

田中優子：喜美子先生おっしゃっていた父性の問題ですが、その言葉でいうとちょっと誤解を受けてしまう可能性もあるのかなと思います。つまり父性の復権を語っておられる方々は、男女共同参画の概念を否定して、子育ては女がやればいい。男は働いて、その稼ぎをもってくる。で家庭のこと、育児のことは一切心配しないで、社会で戦える、そういう男性優位の社会、つまり高度経済成長の時代は、それで来たのだと思うのですが、その過去回帰のような人たちが父性の復権という言葉を使っているらっしゃるで、ちょっと、私はそういうところに反応してしまうのですが、けっしてそうではないということで、皆さんには考えていただきたいなと思っています。

家庭ではお父さんもお母さんも、それぞれの役割があって、両方が、いっしょに子育てをできる環境が、私たちの世代にはほとんどない状況でした。山口拓さんなんかの世代になると、私とは15年ぐらいの開きがあるのですが、新しい若い世代だと思いますが、子育てには、自分たちも関わりたいし、自然に一緒に育てようという気持ちがあって、いいのかもしれない。また世の中が不況ということもあって、残業で家庭を顧みる機会がないという考え方をしている人も中にはいるのしょうけれども、それが減っているのかもしれない。そういうことで子育てに関われるようになってきているのかもしれない。そこで注意すべきは父親としての役割を大事にしてね、ということなのですが、私たちの時代は、うちの場合は、妻も仕事を持っているということで、一緒に子育てをやらなければいけないと夫は思って、一緒にやってきて、「男女共同参画夫」と私は言ってきたのですが、なかなか同世代の間では、良く協力してくれるねとか、偉いねとか、言うのですよ。ウチの夫のことをです。夫の会社の上司たちも、「お前は（子育てをやって）なんて偉いのだ」と言われちゃって、私からみれば、当然じゃないと思うことが、夫はみんなから「偉い」と言われて、そう思って（笑い）私は随分、男性と女性というか、日本の社会の意識が、根深い性別役割分業の固定観念のようなものを思いました。

それともうひとつは、3歳までは母親の手でというものは「3歳児神話」と言われていますが、相変わらずそれは神話ではなく、子育ての基本だと、深く信じてらっしゃる方がいるのが日本社会だと思いました。だから仕事に復帰するに当たって、保育園に預けると言ったら、何て可哀想なの、と多くの人に言われました。ですが私は仕事を続けなければと、自分の生活もありますし、人生設計でもあるので、子どもは小さい時から、集団の中で育てた方がいい、それから一人の母親が密着しているのじゃなくて、多くの大人に、関わってもらって、色んな人会って、愛情を注いでもらって、育てた方がいいと、言うのは、それこそ「ワイク」という投稿雑誌で田中喜美子さんがやってらした色んな勉強の中で、私はそこが開眼したところだったんですが、何としても保育園で育てたいと、強く思ったんです。それで本当に正解だったと思います。

あのまま、一年間は育児休業というか、仕事じゃなくて、母乳だったので、とても仕事に行けなかったんで、しっかり一年間は、子どもを育てたのですが、あのままであれば、私も育児ノイローゼになっていただろうし、カワイイという余裕がなくて、虐待もしていたかもしれない、と思うぐらい、やっぱり育児というのはたいへんなのです。もちろんゆとりを持って、カワイイなと思って育てておられるお母様方もたくさんいらっしゃると思いますが、でも私のようなタイプもたくさんいると思うので、保育園に預けて自分も一所懸命に仕事をやったという自負もあります。ですので、このような子育てをしたい人のためにも、待機児童をなくす環境整備をしていくのは、政治の役割だろうと思っております。

鈴木：体験に裏付けられていて、説得力のある発言でした。貴重なご意見だと思います。ところでさっき泉さんの言われたこれからの政策としてはね、男女共同参画とワーク・ライフ・バランス、子育ての三つの問題が、ひとつの繋がった問題ではないかという認識ですが、本当にその通りだと思います。

さっき田中喜美子さんが言われた子どもができる男は「逃げてしまう」ということですが、逃げてしまう理由を敢えて男の方から言えば、「ワーク・ライフ・バランス」が取れていないから、逃げてしまう、という結果になっているのだと思うのですが、女性の立場からすると、「男女共同参画」の意識が元々ないから逃げちゃうということになっているわけですね。今まではね。そこで、さっきの三つを三位一体で考えて行けば、解決の糸口が見つかるかもしれない。非常に面白いと思って聞きました。

いかがですか田中喜美子先生。もうひとつ、父性の話は、少し分かりにくかったと思うのですが、遠慮なく、もっと突っ込んだ話をお聞かせください。それをおっしゃっていただけると、後の三人の皆さんも、そうかと思うかもしれませんし、ボクはちょっとと言

うかかもしれませんが。これ非常に大事なところだと思います。

田中喜美子：ホンネを吐きますと、物議を醸すかもしれません。(笑い) こういう公の場で、いいのでしょうか。私の思っていることを申し上げるのは、非常に憚られるのですが、勇気を出して申し上げますと、最近男性に対する評価がですね、どんどんどんどん下がっていくんですね。それで自分でも困っているのですが、それは夫が定年になって、家にいるようになったからではないかと思うのです。ここで夫のことをあげつらうのも、何かあまりにも憚られるのですが、たいへんに幸福な人で、今83歳なのですが、80歳まで仕事を持っていた人なのです。それでホントの意味で家に帰ってきて、私と向き合った時に、女性がよく口にする言葉ですが、「この人こんなに何もできない人だったのか」と思ったのです。というのは、私も新たな発見をであって、これはそういう訓練を受けてないし、そういうところに、全然関わってなかったから、昔の男というのは、鈴木先生みたいなそんな立派な男性は別として、歴史的に男性を見ますと、例えばアメリカのオバマ大統領はいいのですよね。でブッシュ大統領は、どうだったか。歴史的に見ると、相手の国を侵略したり、酷い目に遭わせたり、暴力を振るったり、ということをしてきた、これは国家だけではなく、家庭内も同じなのだけど、いつも男なのですよね。それは男の方が力が強いから、そういう形で権力を、握ったということがあるので、権力の座に就いた時に、それを暴力的な形で、利用しない人間というのは、非常に偉い人で、なかなかいないものだ、と思います。

だから女性がね、そういう立場になっても、イギリスのエリザベス女王なんて人もいましたね。ビクトリア女王もいます。エリザベス女王の治世は、よく治まっていました。日本でもですね、歴史的に女王というのは一応いました。それでまあ、ホントの意味で、権力握ったら、女もどうなるか、例えば中国の西太后というもの凄い政治をしたと言われていて、あんまり一概に言っただけいけないけど、良いこともしているけど、悪いこともしているのは、圧倒的に男が多いのです。これは偏頗（へんぱ）な意見だと思って、普段は言わないようにしているのですが、今までの社会では実際としてそうだったのですね。女がこれからの時代に伸びていく、当然のことです。で何故伸びるかという、もう男の持っている筋肉の力がなくなってきたからなのですね。男が権力を握ったのは、力が強かったからなのです。今までの社会では。だけど、もうそれがいらなくなった。色んな戦争でも、ボタンひとつでできる世になった。それだったら、女だってできるわけで、そのところで、男女の力関係が、本質的に変わってくるわけですね。だから、これは男が偉いのか、女が偉いのか、男がダメなのか、女がダメなのか。私が言っているのは、偏波でバカな理論なので、あんまり言いたくないのですが、私は基本的にですね、動物の世界を見ても、男の方が闘争的だと思います。これは多分メスを争い、強いオスとして、自分の精子を、残すためにメスを獲得しなければならないという本能から、多分男の暴力性という

ものは来ているのではないかと思います。だからそれはおそらく自然なことなのだと思いますが、その為にどんな大きな悲劇が起こっているかということを考えなくてははいけない。

10. 田中喜美子さん 日本は女性的文化の国

相変わらず戦争が、世界中で起きていますね。こないだまで、イラクで戦争がありました、これはオバマ政権でも受け継いでいるわけですね。だから日本は、そういう形の男の国であってはいけない。女ならではの夜も明けぬ国、日本。そういう国に私は日本をしたいと思います。日本というのは、昔から女性的な国なのです。日本の文化は非常に女性的です。それでそれは悪いことではなかったのです。日本にとって。非常に平和な国でした。しかも文化程度の高い国でした。で日本は、これからどういう国にあらうとするのか、どういう国であるべきなのか、という根本のことを考えなければダメだと思います。その前に、男性文化、女性文化ということが、かなりクローズアップされて、国民の検証の対象になる日が遠からず来るのではないかと思います。

大体私はスタンスとして、男に対して批判的であったのですが、それはウチの亭主をみていると、余りにも、能力がないのでびっくりしちゃって、「ええ、こんなに何もできない人だったの」と思って、それはやらせようとしなかった、私も悪かったのですが。何でもできちゃうのですものね。今の社会というのは、女の手もほとんどいらなくなるのではと思っています。今に私は日本では、家庭でもお料理もしなくなってしまうのではと思っています。今もう、洋服を縫ったり、着物を縫ったり、一切しません。でもこれは百年前にはしていましたね。で女性の日常生活から裁縫（ソーイング）ということはなくなっていました。そのうち食べる（イーテング）ということも同じようになって、後百年ぐらいすると、「え、家の中でお料理してたの？」という時代が来ると思います。これは本当に危険な事なのですね。

人間がこれからどういうことに成っていくかと言うことで、とっても危険な部分があると思いますので、特に政治に携わる方達には、よく考えて欲しいと思いますし、私たち女性も、そういう現実を考えながら家庭を作り、子育てをしなければならないと思います。以上、男の人に対しては、私は評価は低いです。（笑い）つまり、男の権力は暴力の上にあります。それがひとつ。それから、男というのは、どうも頭の作りがどこかおかしいのではないかと、思っているのです。前は女の脳みそは足りないと言われていました。脳幹の具合がね。女は違うのだと、だから女はバカなのだと。ところが私は最近、どうも男は頭がおかしいのではないかと、いうように思ってきたのです。（拍手）酷いことばかり言ってますみません。

鈴木：子育て、少子化との父性の結びつきのこと、もう少しお話しください。田中さんの

男性論とどのように結びつくのですか。

11. 子育て欲求が満たされないと泣く子に育てないことから始めよう

田中喜美子：良い質問をいただきました。閃きました。子育てによって、そういう男を作らないことです。女性の世界もちゃんと理解できる男。だけど弱々しくて、すぐにビービー泣く男の子ではなくて、本当の男らしさというのは、私はあると理想を抱いているのですが、本当の男らしさとはなんだろう。本当の女らしさってなんだろう。そこで一番良い形は、自分の子どもを育てる、それはどういう風にしたらいいかというと、その理想を念頭において、育てるということだと思います。男だから、とほいほい甘やかしていたら、ダメです。不登校になる子どもというのは、男がほとんどなのです。それは完全に女が、そのように育てているからなのです。とてもこれは難しいことですが、男の子は非常に育てにくいのです。女の子は元気いっぱい。男の子はへなへな。それでしょっちゅう、閉じこもりになってしまう。今引きこもりが百万人いる。でそれもほとんどが男と言われています。これは完全にどっかおかしいです。それは母親の育て方に原因があると、私は思います。

鈴木：分かりました。子育て問題と結びつきましたね。でいよいよ時間もなくなってきましたので、まとめに入りたいと思いますが、最後に少子化問題、子育て問題に、これだけは言っておきたいということを述べていただきます。

田中喜美子：鈴木先生、さっき男性に悪い事ばかり言ったので、最後に一言云わせていただきたいのは、今日鈴木先生を含めて、ここに列席された御三方の男性の意見を伺って、ああ日本の男も良くなってきたのだ、という印象を持ちました。(笑い) これは本当です。これから大丈夫なんだ。こういう男性の方々が増えてくれば大丈夫なんだと思います。その意を強くしました。

12. 山口拓さん・田中優子さん 少子化対策も地域主権で進めることが大事

山口：最後に、泉先生にまとめていただく前に、地方議員である私が思うことは、細かな子育てに関わる政策というのは、私たち地方の議会に任せていただいた方が、それぞれの地域特性に合わせて、施策の展開ができるので、任せていただいた方が、いいと思っています。国に立てていただきたいのは、統一した対応が必要な施策については、当然国が統一的な方針を打ち出していただきたいということと、あとは地方の努力をしっかりと、援護する仕組みだとか、財源の確保に、国には是非努めていただきたいと思います。

今、児童手当の拡充だとか、医療の充実だとか、税制の見直しだとか、教育費の軽減だとか、さまざまな課題を民主党も提案をし、国の柱として立てていただいている最中だとは

と思いますが、何と言っても、少子化の問題は、何が原因なのかということも、大事なのですが、それをどのように解決していくのか、少子高齢化という問題が、少し先行しているので、高齢化の問題と少子化が合わせて考えられがちですが、人口の問題として考えれば、社会保障を構築するために少子化問題を考えれば、どこにゴールを向けて進んでいくのか、少子化問題に取り組む先進国というのは、必ず明確な目標を持って、取り組まれているわけでありますから、日本も早く、その目標というものをうち立てて、進んで行って欲しいと思います。そうすれば少子化問題解決に向け地方議員である私たちも動きやすい環境が整うのではと思います。

田中優子：今日は政府から泉大臣政務官に来ていただいたので、お忙しいところありがとうございました。是非とも地方は地方でその実態に合わせて、頑張るので、国の方は大本のところで、つまりそれから福祉の意味では全国どこに行っても、この福祉を受けられるという最低ラインというものがいいと思いますが、保育所のようなものが、いろいろな規制でやりにくいという部分は是非とも緩和していただいて、財源も地方に移譲していただき、今日の地方の現場では悲鳴が毎日届いているということも分かっていたらと思います。以上、私のまとめの言葉とさせていただきます。

13. 泉さん 少子化・子育て対策も地方分権にチャレンジします！！

泉：別に政府を代表して発言するつもりはないのですが、地方分権のお話しができました。子ども手当もそうですし、保育所の基準もそうなのですが、今官僚達がよく言うのは、「こんなものを地方に任せたら、酷いことになりますよ」ということです。まあ世田谷のような自治体であればいいかもしれませんが、官僚は「どこどこの自治体では、せっかく地方にお金を渡したら、別なことの使われてしまった」というようなことです。

でも、そんなことを言っているから地方分権がずっとできて来なかったわけですし、どっかで「エイヤー」と権限と財源を渡さないと、いつまで立っても、地方分権なんて、できっこないのです。できないところだけを見て、「私たちがいます」となる。でそれでやって来たのかというと、やれてこなかったわけですから、まさにそこは柔軟な予算と権限を自治体に渡していくというのは、私たちも同じ考えです。今政府の中で官僚たちと戦っているというのが、今の状況だということをご理解いただきたいと思います。

鈴木先生がアメリカとスウェーデンのお話しをされて、アメリカとスウェーデンでは出生率が上がっているということですが、その前に田中喜美子先生が、この不況下でも女性の就職率は、なかなか堅調な動きを見せているというお話もありました。私も同じ説明を別の方から受けまして、不況のこの時代に煽りを喰っているのは男性なんですね。煽りを喰っているという表現はおかしな言い方ですが、実は男性の雇用そのものが、高コスト

体質であったと、だから不況下では維持できない、ということもあって、実はアメリカなんかでは、不況の時に女性の社会進出が進んでいるということで、日本も不況だ、不況だ、辛い、辛いと言っている一方で、ここはまさに社会を変えていくチャンスでもあると、いうことなのだと思います。ですからこういう時にこそ世の中に出て、成長性をしっかりと確保していくことで、さらにこの日本は、女性の社会進出が進んで行くということになると思います。一方では女性が、男性の社会に近づいていくのが、本来の意味の「男女共同参画」ではないと思うのです。そういう追いかける（キャッチアップ）のが「男女共同参画」ではなくて、あくまで男性も女性も、それぞれの個人の持つ特性が活かされる社会になればいいということだと思いますので、男性ももっと家庭進出するべきだと思います。で家庭で育児をした男性が、場合によっては会社の中で評価されるような風になっていいのではないかと思います。

14. 泉さん 企業にも男女共同参画の文化を根付かせる施策の検討

今、実は福島大臣と構想を練っているのは、日本ではちょこちょこあるのだそうですが、公共事業の入札要件なんかですね。その会社が、どれだけ、男女共同参画対策をやっているか、どれだけ子育て支援をやっているか、いうことを入札要件にしようという考え方があって、そのことを国でも考えていこうじゃないか、という話もあるのです。やっぱりこういうことも含めて、今までにない新しい観点に立って新しいことをやる。新しい政権では、今までの、ワクを越えたものを、色んな意味でできるのではないかと思いますので、是非進めていきたいかなと思っております。本日はどうもありがとうございました。

鈴木：ありがとうございました。政治家のお三人には、政治家としての姿勢それから個人的な子育ての経験を踏まえてたいへん貴重な意見をお話いただきました。ありがとうございました。（了 採録佐藤弘弥）